大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正二年十一月一日發行　第二巻第二號

近代思想

十一月號

■獨善主義者に（詩）……寒村（一）

■科學的理想（評論）……安成貞雄（三）

■獅子と兎（小話）……安成二郎（八）

■胡麻鹽頭（雜錄）……堺利彦（一三）

■伊庭孝一座（批評）……寒村（一四）

■獏（小說）……德永保之助（一六）

■小川巡査（小說）……△○生（二一）

■大久保より（雜錄）……榮（二五）

■新刊（批評）……記者（二五）

■虐殺の翌朝（小說）……荒畑寒村（二六）

■寄贈雜誌……（三二）

近代思想社

東京府下大久保百人町三五二

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Asia Library
AP
95
J2
K47
no.14

新音譜賣出し
ニッポノホン

鳴渡れり!! 噫々鳴渡れり!!
蓄音機の朗々たる美音は實に寒村僻地に鳴渡れり!!

何の故ぞや。此れ其工場に於て多年研究に腐心し之が改良進歩に心膽を碎きし賜に外ならざるなり
弊社は華客の趣向を旨とし嶄新なる音曲を選び玆に滿天下に紹介せんとす

●**ドンブラコ**。（桃太郎一代記）帝國歌劇部員演奏（鷲印兩面盤）
七月賣出しに兒童諸君の大喝釆を得たる北村季晴氏及初子女史**ドンブラコ**は注文雨の如くに來し玆に引續き四種の賣出しを試みんとす　七、八、九、十

●**和洋合奏**（越後獅子、上、下、吾妻八景、娘道成寺）丹誤倶樂部員演奏（鷲印兩面盤）
丹誤倶樂部員の苦心の跡歴々たり和洋兩樂の調和誠に巧妙吾れを忘れて舞躍るの感あり

●**浪花節**（大高源吾、山鹿護送道中付上、中、下 / 西鄕南洲 上、下）東家樂燕（赤鷲印兩面盤）
浪界の尤物東家樂燕現はれたり心身共に溶けんばかりの聲調

●**唱歌**（小學唱歌二宮金次郎、よく學びよく遊べ、雲雀 / 田植、蟬、浦島太郎、案山子、富士山、仁田四郎、雪）（赤鷲印兩面盤）
納所文子孃の玲瓏たる聲音文部省發行の小學唱歌十種兒童諸君の好侶伴たり

●**軍樂隊**（Valse, Loin du Bal, Cavaleria Rusticana Seleetion）陸軍戸山學校軍樂隊（鷲印兩面盤）
世界に覇を爭はんとする戸山學校軍樂隊が其最得意とせる洋樂二種聽いて血沸き肉躍るの感あり

鷲印兩面盤　金壹圓五拾錢
赤鷲印兩面盤　金貳圓也

全國四十の出張所と四百の特約店あり

神奈川縣川崎町
株式會社 日本蓄音器商會本店
電話川崎四九番

東京銀座一丁目
全卸賣及小賣部
電話京橋二五七・二五八・二八八七番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

213-442254

第二卷　第二號

獨善主義者に

此の世のことの一つとして、
不正と抑壓に固められざるは無し。
吾等は馬鈴薯の一塊だも、
そが價を安くする事無く、
人々を失業せしむる事無くしては、
除く能はざるなり。

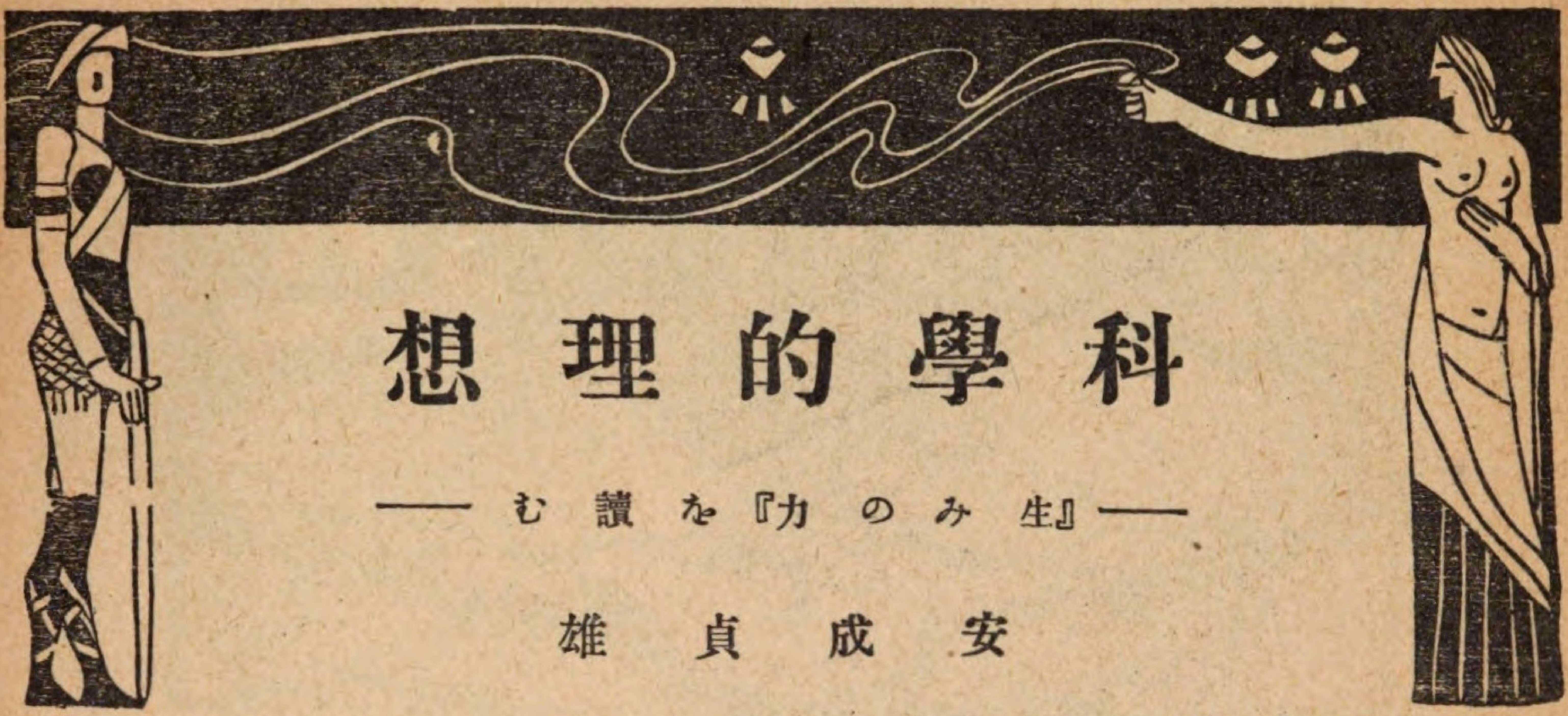
さらば獨善を守らんが爲に、
吾等は人類が日常の事業より、
獨り遁れ去るべきか。

あゝ獨善こそはいと憐れに、
消極的なる目的にはありけれ。
よしやそは達し得らるべしとも――

吾等はその汚るゝを恐れて、
ナプキン無くして食卓に座るべきか。

―（クロスビー）
（寒村譯）―

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN



科學的理想

──『生みの力』を讀む──

安成貞雄

『生みの力』は、片上伸氏が、過去五六年間の文藝評論を集めた『生の要求と文學』の卷首に置いて、序に代へた一論文である。是れが『文章世界』(?)に掲載された時、言つて見たいことが有つたが、機會がなくして過ぎた。其後『生の要求と文學』を贈られたので、是れを機會にして、少しく僕の考を陳べる。

人間の歴史が見た最も偉大な偶像破壞者現實暴露者は、ダアヰンである。ダアヰンは其の進化論によつて、人間の幻夢の一切を打ち破つた。其冷嚴なる證據の前には、宗教家、哲學者、倫理學者等は、皆な其の奉仕した偶像の無力を承認しなければならなかつた。神自身も頭を垂れなければならなかつた。

進化論の爲めに、最大の打擊を受けたのは宗教であつた。人間は神の子孫ではない。猿の親類である。樂園から墮落したものではない。微生物から進化して來たものである。來た所が樂園でないから、歸る所も樂園ではない。神學は、新しい説明の仕方を建設しなければならなくなつた。

哲學も、倫理學も、宗教に劣らない打擊を受けた。是等の人々が、單なるスペキユレーシヨンによつて築き上げた觀念も、理想も、善惡の標準も、殘らず空に歸した。是等の人々も、神學者と同じく、根本から其説を改めなければならなかつた。

而して進化論が、是等の人々に通じて與へた損害は、是等の人々の手から、人生の理想を建設する權利を剝奪した事である。

人間が、樂園から、黃金時代から、高天ケ原から、堯舜時代から、今日の澆季の世に墮落して來たと信じて居つた時代にあつては、過去の人間生活が、現在よりも美しかつた、立派であつた、自由であつたと信じて居つた時代にあつては、個人としては、死んで天國に行き、極樂に行くことが其理想であり、慰安であり、國家としては、黃金時代に歸り、堯舜時代に歸り、若しくは、樂園を此の世に持ち來たすことが、其理想であり慰安であつた。

其時代の宗教、哲學、倫理は、樣々な工夫を凝らして、其の理想を説き、是れに到達する可能を信ぜしめんとした。そして、是等の宗教、哲學、倫理のすべては、肉體を卑しんで、精神を貴んだ。現在の生活を卑んで、理想の生活を貴んだ。肉體の快樂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を卑んで、精神の慰安を倚んだ。

否、發生學的に論ずれば、現在肉體の生活を卑しと考へ、理想精神の生活を貴しと考へる必要が、既成の宗教、哲學、倫理を生んだのである。

人は、はじめから、現在肉體の生活を卑しんで、理想精神の生活を貴んだものでないことは、是れを今日の原始民族に徴して明かである。斯る傾向若しくは、思想の生じたのは、社會が、或る程度にまで發達した時である。即ち、私有財産制が確立されて、富める者と貧しき者とが、判然と分るゝに至つた時である。其時、貧しき者は、諦める爲めに、富める者は、諦めさせるために、現在肉體の生活を卑しみ、理想精神の生活を貴ぶ思想を起し、起さしめた。多くの宗教家、哲學者、倫理學者は、富める者の爲に、貧しき者の福音を說いて、貧しき者は樂園に入り、極樂に至り易きを說いた。貧しき者の友と稱する宗教家等すらも、貧の樂しみを說いて、貧者の諦めを助長した。

最後には、富める者自身も、階級の闘爭から生ずる不安に堪えかねて、貧しき者を諦めさせるために作つた宗教、哲學、倫理に縋りついた。

釋迦も、孔子も、基督も、モハメツトもプラトーも、乃至一切の哲學者、倫理學者も、畢竟此の貧富階級の副産物に過ぎない。而して、人間は、數千年間皆な是等の人々が作つた幻夢に欺かれて來た。

ダアキンは、其幻夢を打ち破つた。人間は、黄金時代、樂園が、過去になかつたことを知つた。人間が微生物から進化したものであつて、從つて、人間の生活が、今日に於いて、一番進んだ狀態にあることを知つた。過去を貴んで、現在を卑しむの理由がないことを知つた。此の肉體が、進化の主體であつて、其の生活以外に生活がないことを知つた。肉體と精神とは、一にして二ならざることを知つた。精神のみの生活なるものが存せざることを知つた。未來はあるけれども、それに達するには、進化の法則に動かされて行くのであつて、宗教家哲學者、倫理學者の說く法則、若しくは其工夫した一見巧妙なるからくりめいた方法によるに非ざることを知つた。

神と、樂園とは破壞されて、其下僕等は信用を失つた。而して、文學者も亦、其信用を失つた一人である。

十九世紀のリアリズムの勃興、ナチユラリズムの發展は、文學者が、信用を失つた事からはじまる。

初め、文學者は、宗教家、哲學者、倫理學者等と共に、理想を說く權利を有して居た。一面に於いては、其等の下働き、若しくは註解者として理想を說いて居た。文學其物の歷史が、明に是れを證據立てる。

希臘のドラマは宗教の行事から出た。漢民族の詩は、漢民族の祭政一致時代に於ける祭事からはじまつた。文學が獨自の發達をなしてから、主從の關係はなくなつた樣に見へるが、其實はさうでない。文學者の理想と云ふものは、遂に其時代の宗教、哲學、倫理以外に出でなかつた。是れは文學の性質上、極めて當然のことであつた。

此の故に、ゲーテは、フアウストを、散々に苦しめて置いて、遂に宗教に救はせた。近松は、當時にあつては超ゆべからざる社會上の障害を、義理と名づけ、是れと戰つて敗れた男女を、佛教が作つた樂園の、蓮の臺で一所にした。

是等は、一面から見れば、其の時代及び其の思想を描いたものに相違ない。併し、他面から云へば文學者には、他の宗教家、哲學者、倫理學者の如く、自分の理想を建

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

設する力がなかつたとも云へる。寧ろ、文學の性質上、其必要がなかつたのである。過去にあつて、文學的作品の深淺、優劣の度が、宗教的含蓄、哲學的含蓄、倫理學的含蓄の濃密如何によつて定まつたのは、即ち文學が是等に對して依從的關係に居つたからである。言ふ迄もなく、文學は、或る時代を支配する宗教、哲學、倫理に對する反抗的思想のマウスピースとして使はれたことがある。而して此の反抗的思想が勝利を得たこともある。併しながら、此の反抗的思想の母たる社會的變動は、根本的でなかつたが爲めに、換言すれば、社會は依然として私有財産制度を基礎として居つたが爲めに、反抗思想の齎らした使命も、畢竟前代の思想と同じく、現在肉體の生活の卑しむべきことを説き、理想精神の生活の尙むべきことを敎へるに過ぎなかつた。

此の點に於いて、文學者は、宗教、哲學倫理の下僕として、諦めの說教の手傳をして來たのである。

而して、ダアキンによつて、宗教、哲學、倫理が致命的打擊を被るや、當時是れと依從的關係にある文學も亦、其主人と同じき運命を免れなかつた。

併しながら、文學の打擊は最後に來た。それは文學の性質に基く理由によつてである。文學は、理想を說いた。併し、說かなければならぬと云ふ根本の理由はない。宗教や、哲學やは、理想を說くのが、其生命である。人生觀を述べるのが、其本職である。是れを說述しなければ、存在の理由がない。文學はさうでない。必ずしも、理想、人生觀を說き述べるには及ばない。讀者が理想、人生觀を要求すれば、其需要に應じて、其時代若しくは其國民を支配する理想人生觀を借用しても、何の差支がなかつた。讀者が要求しなければ、借用する手數すらも要しなかつた。理想あり、人生觀を有する人が、戲曲、詩歌、小說の形式を借りて、其等を披瀝するのも亦、何の妨げがなかつた。總てが自由であつた。

其れであるから、宗教、哲學、倫理が、其の偶像を毀たれ、理想を壞され、權威が地に墮ちても、文學は必ずしも、是等と同時に其の打擊を受けなければならぬ理由はなかつた。

他面に於いては、文學は、其性質の自由なのを基として、宗教、哲學、倫理と全く異なる、或は全く相反する理想、人生觀を建てることも出來た。是等が卑しむ肉体の快樂を謳ふことが出來た。其描いた空想の世界には、富の壓迫がなく、貧の苦痛がなく、精神と肉体との快樂の奇異なる一致があつた。而して、其れに達するには何等の難業も、苦行も、修養も、乃至一切の倫理も戒律をも要しなかつた。たゞ、夢想すればいゝのであつた。宗教、哲學、倫理の所說には、必然肉体の欲求の拘束がある、文學の理想には、何等の苦痛が伴はない。寧ろそれを恣にする悅びがある。

此の、喜悅を夢想せしめて、現在の苦痛を紛らかし、忘れさせ、諦めさせるのが、ロマンチツク文學の主眼であつた。

此の點に於いて、ロマンチツク文學は、宗教、哲學、倫理と手段を異にしながら、目的を同じくした。

宗教、哲學、倫理の理想、人生觀等を信じなくなつてから、人間は、單なる精神上のスペキユレーションから出たもの一切を信じなくなつた。實驗濟みのものでなければ、何物をも信じなくなつた。一切を覺めたる、冷やかな目を以つて見る樣になつた。文學も、其の皮肉な眼光を蒙らざるを得なかつた。ロンマチシズムの夢は忽ち破

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

られた。文學的作品中に、理想を托し、人生觀を交へることが、絶對に排斥された。是等を容れるものがあれば、低級なものとして、擯斥された。かゝる創作的態度は時代おくれとされた。そして、其理想人生觀は、冷笑された。眞面目に受取られなかつた。文學者の理想が、是れほど輕んじられた時代はない。

併し、文學は、此の打擊によつて、決して死んで了はなかつた。カメレオンの如き文學は、其尾を切られても、なほ生きて居ることが出來た。

數千年間の崇拜の對稱、理想、人生觀、樂園等を、目前で打ち壞された人間の心理は、程度の差があるが、樂しい夢を破られた心理と同じであつた。彼等は、目が覺めると共に、寂寥、悲哀、孤獨、空虛の感に撲たれた。自然と運命とを支配するものは人間でなくして、冷嚴酷烈な自然と運命こそ却つて人間を支配するものであることを明白に見せ付けられて、彼等は、慄ひ戰いた。彼等は、數千年來の經驗によつて、同じことを知つて居た。けれども其時彼等には、理想精神の生活があつた。行くべき樂園があつた。極樂があつた。救主があつた。今や、其等は泥土に塗れて了つた。賴るべきものがなくなつた。其下に集つて、自然と戰ふべき旗印がなくなつた。殘つたものは、此の肉体一軀である。此の肉体以外に生活はない、現在の生活以外に生活はない其肉体は有限である。而して夫れは、宗教家、哲學者、倫理學者に言はせると、卑しむべく、唾棄すべきものである。彼等は、如何にすべきかを知らなかつた。

此の感覺は、自暴自棄の思想を生んだ。世紀末思想が是れである。頽唐思想が是れである。

一切過去の信仰、理想、人生觀の尾を切られた文學は、『現實を描け』と叫んだ。時代の寵兒たる、ゾラや、モーパツサンは、現實を暴露した。猿の親類たる人間の生活の醜惡、陋劣、卑小は其銳利な解剖を受けて、殘りなく白日裡に露き出された。

他人の醜惡、陋劣、卑小を見ることは、人間にとつて、大いなる慰籍であつた。孤島に幽閉された人が、新たなる流人を喜び迎へる樣に、人間は、他の人間も自己と同じ樣に醜惡、陋劣、卑小の、遠慮なく暴露されるのを見て、大いなる喜びを感じた。其上、過去に於いて、斯る傾向に對して禁止的權威を揮ひ得た宗教、哲學、倫理は、其れ自身の受けた打擊から、まだ癒え切らずに居る、何時癒えるかと云ふ見當さへついて居ない。豫後が不明である。

寫實主義、自然主義は、是に乘じて、其の全盛を極めた。

此の闇黑裡を摸索して光明を得んとした文學者は、無解決だと云つて歸つて來た。舊衣を縫ひながら、宗教、哲學、倫理は、解決がある、歸趣があると叫んだが、彼等自身の外は、何人もそれを信じなかつた。實際揭げた光明と云ふものは、あつた。油の乾いた、光力の微弱なものであつた。文學者の報告は、寧ろ信用を以つて迎へられた。多數の人々は、自ら內に省みて、油の足らない、光力の弱いランプに從つて進むには、餘り力がないことを知つて居た。

文學者の中の勇敢な人々は、闇の中で、苦しみ、惱み、揉搔き廻つて居ながら、なほ、其力を失はなかつた。此の少數の人達の中の或る人は、油の乾いたランプに、新しい油をさして進まんとした。例へばトルストイはそれである、ドストイエウスキイはそれである。また或る人は、其眼に與へられた特殊の力を恃んで進まんとした。イ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

プセンの如きはそれである。

併しながら、是等の人々の勇氣と自信とは尊敬すべきものであつたが、其の方法は全く誤つて居つた。彼は、新しい人生の路案内には、全くの素人であつた。殆んど無智であつた。元來、文學者の中には、道案内の専問家が居なかつた、道案内は宗敎家哲學者、倫理學者の専業である。専問家ならざる文學者は、必要があれば、其等から受賣りして居ればよかつたのである。其の本家が既に商賣を休止すべく餘儀なくされたのであるから、小賣業が間誤付くのは當然である。トルストイ、ドストイエウスキイ、イプセン等は、或は本家の爲すなきを憤り、或は、本家の衰微を慨き、道行く人の迷ふのを憐れんで、自ら道案内者たらんとした。併し、全くの素人であつた。

ダアキンは、是等の人々から、道案内の權利を奪つた。少なくとも、道案内者の試驗規則を定めた。

試驗規則とは何んであるか。進化の法則を知ることであつた。

宗敎家、哲學者、倫理學者が、進化論の打擊を受けて、其瘡痍の療治に苦心して居る間に、全く別途の方面に人生の道案內をなさんとする者が現はれた。この人々は、人間が是れ迄經て來た經驗を科學的に排列し、統一し、其間から一貫した系統を發見せんと努力した人々の間から起つた。此の人達は、嚴重に科學の示す所に從つた。斷じて、事實を廻避しなかつた。肉体を卑しまなかつた。現在の生活を輕んじなかつた否、肉体現在の生活の裡に潜在する人間の能力を唯一の光明とした。人間は前にも云つた如く、現在に於いて、最もよき狀態にある。微生物から今日に至つたものであつて、過去よりも、現在がよい事を知つた。

此の微生物より、今日の人間に至つた徑路から、一貫した法則を捜り出して、其の傾向を究めんとする人々の中から、道案內者が出たのは當然である。此の法則を知らないものは、道案內者たる資格がない。

微生物から人間になつたことは、認めながら、なほ、その法則を究めんとせざる、若しくは、是れと全く相反するスペキユレーションによらんとする古き道案內者は、斯くしてみな落第した。其徒弟たる文學者も落第しなければならぬ。

夫れであるから、無資格者たる文學者が進むべき路がないと云つた所で、それは眞實でない。文學者中の勇氣ある少數の中のイプセンが『將來の可能に到達すべき道』を明に示すことが出來なかつたとしても、別に怪しむべきことではない。

片上氏は『イプセンと雖ども』と云つた。是れは、イプセンが、道案內者たる資格を有しないことに氣が付かない所から出たものであると云はなければならぬ。

イプセンが明に示すことが出來なかつたのは、なほ、宗敎家、哲學者、倫理學者が明に示すことが出來なかつたのと同じことである。

片上氏の云ふ如く、『吾々自らが再び生命の創造者でなければならぬ』。また吾々以外に、生命を創造し得るものがない。意識すると、意識せざるとを問はず、信じ得ると信じ得ざるとを問はず、吾々は生命を『創造』する。吾々が、『未來の可能を信ずることが出來なく』なつても、また『無限の創造力―人間の意力を信ずることが出來なく』なつても、自然の『創造力』は决して休止しない。休止すると考へるのは、物質、精神二元の迷妄に基いた思想である。吾々が、如何樣の態度を採るに拘らず、自然は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

默々として、其爲すべきを爲す。吾々が今日要むる所は、人間の意力を信ずることでなくして、自然は、何をなさんとするかと云ふことである。自然が、吾々を何處へ連れて行くかと云ふことである。而して、これを知るには、吾々が、微生物から、今日迄に至つた間の法則を知るより外に全く道がない。

イプセンは是れを知らなかつた。爾餘一切の文學者も是れを知らなかつた。明に示すことが出來なかつた所以である。

併しながら、イプセンが知らなかつたから、路がないと云ふ理由はない。素人には知れなくつても、専門學者には知れて居る、若しくは、知れる可能性がある。

是に一つの譬を置かう。

櫻に、虫がついたとする。祈禱、まじないによつて、其虫を退治せんとするのが、宗教家、哲學者、倫理學者である。枯れることを惜み、花の咲かなくなることを心配するのは文學者である。櫻と虫との關係を知つて、それを除くのは櫻と虫とを知る専門の博物學者である。

イプセンが、櫻を生かす道を知らないとが、櫻の前途を悲觀すべき理由とはならない。さう考へるのは、イプセンを信じ過ぎるからである。櫻のことはイプセンが一番よく知つて居ると考へるからである。

イプセンが、人生の道案內に於いて素人であることは、其の『第三帝國』の思想によつて明である。今日、人生を知つて居るもので、何人か第三の『帝國』の出現を豫想する者があらうぞ。吾等は『第三帝國の何處にも見出されなかつたことを知つて、』彼れの爲めに、『一種悽愴の感を懷く。』けれども、悽愴の感は、彼れの爲めたるに止まる。それが、人生に對して、決して悽愴の感を抱かしむる理由にはならない。

新しい道案內者は、人間の發達の跡に徵して、潛在能力の發揮によるとした。而して人間の將來の發達の最良の方法は、潛在能力の發露を妨ぐ可き、自然的周圍及び、社會的周圍中の障害物を除くにあることを敎へた。

肉体現在の生活を基として、人間將來の可能に到達するには、是以外に法がない。是れ、イプセンの知らざる所である。

今や、新しき道案內者は、社會的周圍の障害物を除くが爲めに、現在肉體の生活を卑しんで、理想精神の生活を貴ばしめた思想、貧しきものに諦めさせ、富めるものゝ爲めにも諦めさせた思想の根底たるものを傾覆せんとして居る。此の理想は、從來の理想と全く其性質を異にして居る。

イプセンは、『野鴨』に於いて、理想家をすら嘲つた。併し、イプセンの理想は、素人の理想であつて、從來の理想と大差なきものであつた。

イプセンも、畢竟たゞの文學者である。

藝術が藝術の爲めの藝術である間、人生の爲めの藝術である間は、文學者は、世間の需要を滿たすことによつて、少なくとも生存の意義があつた。自己の爲めの藝術たるに及んで、文學者は少なくとも、自分の行くべき道を知らなければならなかつた。

其道を知る爲めに文學によるのは、勞して効がない。何んとなれば、文學は、根本の性質に於いて、其道案內者ではないからである。直ちに人生に就いて求めやうと云ふのは、自信に似て、實は頗る愚かなことである。況して、文學の一廓に立て籠つて人生の眞相に徹したと信ずるに至つては、一の高慢なる執拗である。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

獅子と兎

安成二郎

一

ある日、一疋の兎が、南の森の青獅子のお邸へ出かけることになつた。

此の青獅子は、矢張り山の獅子大王の眷族で、しがない兎にとつては、大王と同じく崇め尊ばなければならないお方であつた。獅子大王はいつも斯う云つてゐた。

『俺は本來獸ではない。人間から出たものである。汝等獸ども、俺に對して忠實なれ。苟も無禮をすると、一口に嚙み殺すぞ』

で、山の獸は、獅子大王の名を聞くと、慄え上つて怖れた。

斯ういふ怖い大王の眷族へ行くといふのだから兎はビク／＼ものでゐた。此の兎は一体、獅子大王には大の反對で、といふのは、大王は一日何にもせずに、朝から晩までノラリクラリと山の中を歩いてゐて、腹が空つて來ると、手當り次第に兎だの羊だの、何でも美味い獸をとつて喰ふのであつた。それで、兎、羊、鹿、驢馬、山羊などの獸の中には、一致して獅子に反抗しやうといふ說を持つものもあつた。しかし獅子はまた、熊や虎や狼や猪などといふ猛惡な獸を、弱い獸を餌食にするといふ共同の利益から自分の配下にしてゐるので羊や兎の連中も中々手が出せなかつた。

多數の力といふ事を羊や兎は熱心に主張した。しかし、獅子や虎がさういふ連中を見つけては食ひ殺すので、運動が阻み勝であつた。中には、多數の團結を待たずに、秘密に獅子を殪す計畫をした羊もあつたが、忽ち發覺して幾匹かの羊が頭を並べて獅子に食ひ殺されて了つた例もある。

また、當然羊や兎の運動に加はるべき筈の獸でその理屈も解つてゐながら、獅子や虎が怖さに始終木の上に逃げてゐる猿や、土の中に隱れてゐる土龍や、藪の中に潛り込んでゐる狐のやうな狡猾な卑怯な獸もあるので、實際、兎や羊の理想實現は頗る困難であつた。

二

さて、青獅子のところへ行く兎とても、さういふ理想はもつてゐるものの、さういふ山の形勢で自分で其の日其の日の食物を探して歩かなければならなかつたが、草の葉一本も皆んな獅子や虎の持ち物で、無斷で足の指も觸れるわけにいかないので、仕方なしに、ある一疋の虎に使はれて、虎の威を借つて僅かに食物にありついてゐた。

その虎の云ひ付けで、兎は青獅子のところへ遣られるのであつた。

『青獅子は、俺があの謀反人の羊の仲間だとは知るまいが、何にしても怖いことだ。あたり前の兎のつもりで行けアいゝけれど、それでも何處かに俺を知つてゐる狼の奴でもゐやうものなら、今日が命日にならないとも限らない。さうでなくとも青獅子の腹の空つてゐるとこへ行つては駄目だ。これは恰ど十二時過ぎの、晝飯の濟んだ時刻に行つてやらう。そして、第一にあたり前の兎よりも、もつと愼んで鄭重にお願ひの趣を申上げることだ。言葉の間違ひでも、俺達の仲間は始終ひどい目に逢つてるんだからなア』と兎は考へた。

さう思ふと兎は自分でも不思議な位、獸が變つたかと思はれる程、獅子に忠實な心持になつた。

兎は餘り後足で跳ばずに、ソロリ／＼と龜のやうに歩いて行つた。

『南の森も廣いが、青獅子の邸は一體どこらだらう。俺は平生そんなことに氣をつけずにゐたが、困つたな。獅子の眷族も隨分ウヨウヨあるからな。だが、あの道案内の狼にでも聞いたら、青獅子の邸も知らない不忠者ッて、一口に食はれるかも知れないぞ。しかし、用を足さずに歸つちやア、家の虎に食はれるから、どつちにしても同じことだ。前門の狼、後門の虎か。仕方がない、先づ羊か鹿にでも聞いて見やう』

三

南の森の端で、折よく一匹の羊に逢つた。『モシ／＼羊さん、青獅子樣のお邸はどちらでせう、御存じなら何うぞ敎へて頂きたう御座います。』

『青獅子さん？　あの人の邸ならまだ／＼ずつと森の奥だ』

『有り難う存じます』と云つて、兎は、あの羊は餘んまり青獅子を敬つてゐないやうな物の言ひぶ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

りだがそれでは俺も、もう少し暢のんびりした心持で、もつと後足を伸ばして歩かうと思つた。
今度は森見廻りの狼に逢つた。
『狼さん、一寸伺ひます。青獅子さんのお邸はどちらですか』
『あ、青獅子さんか、あれは此の小流れの對岸だ。橋を渡つてから聞いて見なさい』
『有り難う御座います』ピョコンとお辭儀をして、兎は考へた。『狼などは一番青獅子を尊敬してゐるものと思つたのに、あれはなンて、隨分失敬な言葉を使ふもんだな。そして俺には却つて、聞いて見なさいなンて、叮嚀なことを云つたりしてさ、此節は狼も話せるね。そろ〳〵俺も後足の全速力を出さうかな』
橋を渡ると、今度は猪に會つた。
『猪さん、青獅子さんのお邸は何處ですか』
『青獅子？　そらあの大きな邸だ、あれが見えないか馬鹿ッ。ウ、お前は兎だナ、青獅子に食はれに行くのか、あいつに食はれるより俺に食はれた方がよか、ハハア』
兎は一跳びにピョンと跳んだ。
『あゝ怖い、危なく食はれるところだつた。だが猪なンか一番獅子大王の恩を受けてるといふ話だが、あいつなンて云やがるところを見ると、獅子もそれはどのものではないと見えるわい。もう獅子なんか怖くない。いや、食はれるから怖いには違ひないが、そんなに恐懼おそれることはない。却つてあんな亂暴者の猪に注意しなけれァいけないぞ』
兎はもう家を出る時のビク〳〵した氣持がすつかり無くなつてしまつた。伸びるだけ後足を伸ばして、ピョン〳〵と威勢よく跳んで行つた。間もなく青獅子の邸の門前へ罷り出た。
見ると門には、二疋の狼が番をしてゐた。
『モシ〳〵狼さん、こちらが青獅子さんのお邸でございますか』
狼は眠さうな眼をしばだゝいて、
『あゝさうだよ、青獅子は今頃晝寐でもしてゐやがるだらう。何か用かえ？　俺が聞いて置かうか』と、いかにも兎を食ひたさうな調子で云つた。
兎は周章てゝ門の内へ跳び込んだ。
『門番の狼までがあんなに輕蔑してゐるとは思はなかつた。何にしろ之は有難い。これなら俺は對

等の交渉で、家の虎の願ひを果すことが出來るだらう。案ずるより生むが易いとはよく云つたものだ』

四

『お頼み申す』と兎は青獅子の玄關で怒鳴つた。すると、

『コン〳〵』と云つて、一疋の狐が勿体ぶつて出て來た。

『やア、狐君、……』

『狐君とは何だ、失敬な』と狐は一層狐色になつて怒つた。『畏くも青獅子様の執事に向つて無禮な奴！』

『ハハア、獅子の威を借る狐は珍だね。まア冗談は止し給へ。執事と云つたつてつまり取次だらう俺は東の洞穴の虎の使ひだが、此處の青獅子に會ひたいンだ』

『こらッ、青獅子様を呼び捨てにするとは無禮至極ッ、』

『ハハア、君だつて云はんこともあるまいがね。狼だの猪だのはもつとひどいのを君は知らないのか』

『何をッべコべと、下り居れッ！』

『ヘッへ、現に此處の門番の狼だつて、青獅子のことを晝寐でもしてゐやがるだらうッて云つたぜ。取り次がなけア今に俺ン所の虎が來てお前を食ひ殺すぜ』

狐は怒氣心頭に發して、黒焦げ色になつて怒鳴つた。

『狼！狼ども、此の無禮者を食つて了へ！』

すると、門にゐた忠良な狼が二疋で跳んで來て馬鹿正直な兎の頭に嚙みついて、骨も殘さず食つて了つた。

狼は其の由を直ちに、青獅子に言上したので褒美として生揚がんもどき各一枚宛を賜はつた。

■上山草人の近代劇協會は來年一月より雜誌『近代』を出し、劇を中心として廣く藝術界に於ける新氣運の興作に努むべく、先づその零號として十一月中旬にノラ及び秋夕夢に關する研究號を發行する、編輯は加藤朝鳥主宰するよし。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

胡麻鹽頭

澁六

■伊庭孝一座の『チョコレート兵隊』を見た。譯文には稍不滿があるが、演技は先づ上出來だと思ふ。伊庭君のチョコレート兵隊も、酒井よね子のライナも、玉村歌路のルカも、橫山運平のニコラも、皆よかつた。

■此作の梗槪は、曩に僕が本誌上に紹介したが、其表題は『武裝と人』として置いた。其時にも書いた通り、此作の主眼とする所は、人目を眩惑する、燦然たる外面の武裝を解き去つて、在の儘の人間を露出させる所に在る。ショウは此の作に Antiromantic Comedy と註して居る。伊庭君はそれを非武士道劇と意譯して居る。誇張的な、幻想的な、僞善的な武士道が頻りに世上に唱道される此頃、其の假面を引んむいて卒直に人間の本性を見せつけるのは、實に有益な教訓である。

■總てショウの作は、理想の皮を剝いで現實の眞を求めるといふ態度である。之が世の道學者、お宗旨屋、似せ愛國者に憚かられ憎まれる所である。

■然しショウにも又理想がある。それは『超人』の理想である。『超人』と云へば誰でも直ぐにニイチエを思ひだすが、ショウの超人はニイチエの謂ふ樣な、人間ばなれのした、妄想的超人ではない。又世の聖者、隱者の類が謂ふ樣な、生を否認して掛る、寂滅爲樂的の超人でもない。ショウは『生の力』の渴仰者である。『生の力』は即ち『世界意志』で即ち又『本能』である。そこで人間は、世界意志發展の進路を善く見定めて本能に從うて行くのが當然である。空華の如き幻想妄想に捕はれて、眞純の本性を蔽ひ、或は之を曲げんとするのは、人間の向上進化を阻害するものである。斯くて人間が其の本能の指ざす所を十分に自覺して、善く意識的にそれを遂行して行くならば、即ち超人の域に達するのである。英國人が悉くクロンエルとなり、羅馬人が悉くシーザアとなり、獨逸人が悉くルーテル、プラス、ゲーテとならなくては駄目だといふのが、ショウの理想である。ショウは超人の平民化を說き、全人類の超人化を望むのである。

■ショウの『人と超人』の譯本は、十二月に丙午出版社から發行せられる筈になつて居る。僕は今、高島素之、小原愼三、安成貞雄、和氣律次郎等の諸秀才に賴んで、色々と譯文に修正を加へて居る。『英語青年』の批評を更に批評したり、獨逸譯を參照したり、三人寄れば文珠の智慧を絞つて、論難攻究に夜を深かしたりして居る。と云へば大變立派なものが出來そうであるが、只時間と方法との許す限りに於いて、一應出來る丈の力を盡すといふ丈の事である。出來た上で又宜しく大方の御教示を願ひます。

■上司小劍君の、『社會劇』と銘を打つた、『善人國』といふものをチョツト見た。是まで六人の勞働者のして居た仕事を新器械が來た爲め三人でやるやうになつたなどゝいふ、社會主義の本か、失業者問題の本かにありそうな事がチラ〳〵書いてある所など蓋し小劍君のエラサを示す點であらうが、全體から云ふと、何が何やらサツパリ分らぬ。どうか『銘』の手前今少し踏みこんだ事を書いて貰ひたい。

■人並に上野の文展を覗いて見た。三越を見たり、女優劇を見たりするのと同じ樣な氣持がした。悪い氣持ではなく。彫刻の處で、牛刀を以て鷄を割かんとして居る野人の風趣と、牧童があちら向になつて牛の背に乘つて居る『双ながら悠々』と題したの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を面白く見た。それかと思ふと、『離れゆく心』と題した、若い娘の愁を帶びた顏と、元一葉の女將下山京子の似顏と云はれる（僕にもそう見えた）『芝居茶屋の女』の顏にもチヨツト心を引かれた。一方にあんな古びた趣味を殘しながら、一方にこんなハイカラげた趣味に反感も起らぬかと思へば、我ながら微笑せられる。

■去年(?)讀賣新聞の樓上でヒユーザン會の展覽を見た時、何だか妙な畫ばかりだとは思つたが、それでも舊慣のコンヴエンシヨンを脱しよう、脱しようと努めて居るらしい所に、一種の敬意を感じたが、上野の展覽會ではそんな心持は少しも起らなかつた。

■田中正造翁の葬式にはとう〳〵行かなかつた。丁度仕事が込みあつて忙がしかつたからでもあるが、然し又、餘り事がお祭りらしくなつたので、己なんぞが行かなくてもといふ氣持になつたからでもある。現に僕の知る或婦人の如きは、素晴らしい葬式だからと云ふので、態々紋付の借着をして出かけた。そして其人が、簑を着た田中翁の畫葉書を持つて歸つて見せた。

■石川三四郎君が折々ベルギーから畫葉書を送つてよこす。此間は巍然たる大建築の聳えて居るのをよこして『或ベルギー人と連立つて此前を通つた時、其男が一種皮肉な笑を帶びて、是が王宮だと敎へて吳れたが、其の皮肉な笑が今も眼に殘つて忘れられぬ』と書きそへてあつた。ベルギーの王樣は、南阿の鑛山を自分で經營したりする、同國第一の大資本家だと聞いて居る。

■先月の事、妙な因緣で片岡仁左衛門君と語り、又伊井蓉峯君と語るの機會を得た。片岡君は世の末を嘆ずるといふ樣な態度と、然しながら是は一時間違の成行だと云ふ樣な、無頓着な態度とを示して、頗る快活に話して居た。伊井君はどうかして此の世の成行を引止めたい、或はどうかしてそれに追ひついて行きたいと云ふ樣な態度で、稍やあせつて居る姿であつた。

■此頃どうも面白い論文が見つからぬ。雪嶺先生も愛山先生も、どうやら二番煎じ、三番煎じの氣味がある。さすがに風味は惡くないが、色が薄い。

■西川文子君は引續き大いに其の外助主義を發揮して居られる。誠に人氣を强うする次第である。然しどうか我々御亭主たる者を內助にして了はない樣に願ひたい。

■此頃僕に靜座を勸めた人がある。僕答へて曰く、靜座は猶貯金の如し、結構ではあるが中々出來ない。尤も專門にそれをやるなら出來もしようが、貯金專門家にはなりたくない。よしや老後に千圓ばかり殘して見ても、迚もそれでは浮ばれない。

■いつぞや本紙に僕が病氣の樣に書いてあつたので、あちこちから御見舞を受けたが此頃では平常の通りになつて、鷄と松茸とでビールの一本を平らげる位のアザをやつて居ます。

■此の霜枯の時節に賣文社が電話を引いたと云つて不思議がる人がある。然し何も不思議がる事はない。賣文社は今回奉賀帳的社債募集をやつて、躱れて御吹聽に及んで置いた『電話架設中』を實現した迄の事である。今では賣文社も萬ざら冗談ではなくなつた。一廉事務的の商店として種々責任ある御注文をも受けて居る。何卒其分にして御披露のほどを願いあげまする。序でに電話番號を申上げて置く。

新橋 二八五七。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

伊庭孝一座

寒

■初めは『出發前半時間』一幕。先づ室内の家具の粗末なること、是が苟くも宮廷唱歌役者の泊つて居るホテルかと驚かれる。就中、正面のドアの如きは、不態で、開閉に喰ひ違つて、どう見ても書生芝居の西洋室のドアだ。手風琴の鳴らないだけが、まだしもだつた。伊庭のオペラ役者ジエラルドウは、體が小さくて、豬首のやうに肩が高くつて、腮の白粉が目立つて見つともなかつたが、非常にデリケエトな心もち――それは、自由劇場の左團次では、到底現はすことの出來なかつた――は、よく現はして居た。武田の作曲家ザユリンクは、如何にも自巳の才能を信ずること厚く、社會の冷淡酷薄を憤ほること深き老人であつたが、左升のデユリンクに見られた、空想と失望との戰ひに疲れて意氣銷沈した、絕望的な氣分を欠いて居た。木下の貴婦人ヘレネの服裝のホテルの家具同樣貧弱極まれるには驚いた。胸が開いて肌の見ゆるのは、新しい流行なのかも知れないとして、犬の吠えるやうに叫んだり、短銃で自殺する時のやうすは如何だ。よくあれで、見得をしたり、虚空を摑んで落ち入つたりしなかつたものだ。幕切れにジエラルドウが、『不可抗の事故』云々と云つたが、自由劇場では『廣告になる』云々と云つた。廣告では余り藥が利き過ぎると思つたが、今度でやつと解つた。

■然し、僕には『チヨコレエト兵隊』よりも『出發前半時間』の方が面白かつた。シヨウの駄洒落や地口で人を笑はして置いて、その中にホンのお呪ひほど、帝國主義や武士道的精神に對する皮肉を匂はせるやり口よりは、此の劇のやうに、娘を捉まへ、零落した老天才を捉まへ、或は貴婦人を捉まへて、端的に、眞つ向から、その夢想を破り、幻影を滅ぼし、現實を曝露して、その自惚の鼻を挫く方が、僕には余程面白い。

■次は『チヨコレエト兵隊』三幕で、曾て堺が本誌に筋を書いた、バアナアド、シヨウの『武裝と人』の改題である。こゝでもブルンチユリイ大尉に扮する伊庭が、獨り大に異彩を放つて居る。第一幕のライナの寢室では、いくらシヨウの芝居がイブセンなんかと違つて居ても、あんなに飛び廻り跳れ廻るだらうかと思ひ、また直立不動の姿勢をとりながら頻りにアクビをするのが、余り擽り過ぎるやうにも思つたが、二幕目と三幕目では、余り動かないで輕妙な味を見せた。武田のペトコフ少佐は、人の善い、女房に甘い、そして暢氣な性格をよく現はして居た。『横山の下男ニコラは、三幕目の圖書室でルウカを口説く處の科白が、成る程すこし新派めいて居た。

■酒井よれ子のライナはいゝとしても、玉村歌路のルウカは氣に食はざること夥しい。舞臺の上でワザとらしいフザケ方をしたり、甚く達者を氣取つたりして實に不愉快だ。それから、五十嵐芳野の母カザラインの扮裝だ。手や顔の恐ろしげな皺が、渦卷のやうな模樣の衣服に對照されて、まるで南洋の喰人種族のやうに見へた。安成が『臺灣の觀光團に加はつて來たヤユツ女史だネ』と云つたが、全く名評と云ふ外は無い。此の『チヨコレエト兵隊』では、室内の家具、就中、第三幕の圖書室の窓硝子の一重などは、頗ぶる貧弱たるを免かれなかつたが、然し雲を被つたバルカンの連山や、ブルガリアの市街などの書割の、印象派風

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

の試みは新らしかつた。

■『出發前半時間』といひ、『チョコレエト兵隊』といひ、例れも非常に面白かつた。之を彼の藝術座の、『ヷンナさん……』なんていふ、堪らない愚劇に較べれば、觀る者にとつて實に命冥加な次第であるが『チョコレエト兵隊』といふものに對しては、僕竟に一言無くして止む能はずである。僕には一体、バアナアド・シヨウを難有がつたり勿体ながつたりする人の氣が知れない。イヤ、こんなことを云ふと、また堺のオヂさんや、安成にお叱りを蒙むつて、新思想の罰が當るかも知れないが――。假令へば、『チョコレエト兵隊』にしてからがそうだ。帝國主義の迷信を破壞するの、武士道的思想の謬妄を曝露するのと、看板ばかりは御大層だけれ共、不幸にして僕には、あの芝居からそういふ熾烈な、嚴肅な、眞摯な心もちを些しだつて得られはしなかつた。何の事は無い、まるで些し毛の生えた茶番を見るやうなものだ。『肉叉が何千對……敷布が何萬枚……まだ諸君の持たないものを持つて居る。』とブルンチユリイ大尉。ペトコフ、カザライン、ライナ、サアヂアスの面々、『どうしたと』、『へイ、三つの國語でございます。』まるであれだ　。

■シヨウの芝居の書き方が、そんなばかりで無いのだ。彼の劇の中には何がある。新哲學がどうの、超人の思想がこうのと、偉そうな事は云ふが、何處にそんなものがあるか。駄酒落と、輕口と、地口と、お喋べりと。その中を往き場に迷つたやうに、皮肉がウロウロして居る。一体、現代の人心に深く根ざして居る迷信謬想を破壞するのに、飴をシヤぶらせて置いて、その隙に苦い丸藥を抛り込むなんといふのは、甚だ卑怯なやり方である。何故に堂々と戰ひ、堂々と論じ、堂々と進まないのか。彼は現代の夫婦關係が、相互の完全なる了解と、相互の僞はらざる愛情と、相互の獻身の誠意とに置かれず、盲目と、卑屈な寵愛と、利己的觀念との上に築かれて居る事を自覺して、之を破壞せんとする勇氣に於て、現代の科學すらも、紳士閥の利益の爲めに存廢せられ、眞理の爲めに戰ふ學者の迫害せらるゝ事實を見て、之が爲めに叫ぶ勇氣に於て、到底イブセンに比すべくも無い。卑怯なるアイコノクラストよ、そして今まで、彼によつて破壞さるゝ如き偶像を崇拜して居た人々の賢さよ！。

■シヨウの劇を論ずるのに、舞臺の上の効果の外に、種々な道具を並べて作者を偉くする事が許さるゝならば、桂太郎は正しく日本の大政治家に相違ない。いや、種々な道具立までも無い、シヨウの劇は人に面白がられる。そして如何いふ人種が一番感服するかと云へば、先づ江戸つ子、それから新聞劇評家といふ馬鹿者共であらう。三百年間徳川氏の壓制に對する卑屈な服從に馴らされ、僅かに皮肉諷刺に鬱悶をやつて快とし來れる彼等には、シヨウの輕口、シヨウの地口、シヨウの駄洒落が、最もよくその心意氣と共鳴するのである。そしてワアハワアハ笑つて居る間に、最も肝心な、然し分量から云へば一番少ない皮肉諷刺は、彼等の耳の傍を通り過ぎて了うのである。シヨウはフエビアン協會創立者の一人である。社會主義を薄汚ない勞働者のものとせず、絹帽に燕尾服の紳士のものとせる人である。惟ふに他日、日本に社會主義が流行し出した時、大日本フエビアン協會を創立する紳士諸君は、今日シヨウを崇拜しつゝある人々であらう。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

貘

徳永保之助

一

すべては、天が眞黒な霧をふらして、あらゆる光りあるものを消してしまつたやうであつた。瞳をこらしても、何ものゝ影をも認めることが出來なかつた。天を仰いでも、雲間をもれて光る小さな星一ッ見えなかつた。何か黒い大きなものが、靜かに、深い呼吸をしてゐるやうであつた。只、綠葉の、心をそゝるやうな靑い、甘い香ひに、あたりに樹木の多く、且つ繁茂してゐることがわかる。彼らは、時々その上を吹きわたる夜のそよ風に、秘密のさゝやきを取りかはすのであつた。

一しきり、近くの樹の上の暗に、夜鳥の、ghe, ghu, gho, kho, の四音を不完全に、半ば發音するやうな、あやしい、呪ふやうな啼き聲がして、それが止むと、後は、息を殺してゐるやうな暗い沈默。――

『きゝたまへ、あれを！』

突然、かう人のさゝやく聲が、暗の中に、靑草の葉ずれのやうに、ほのかに聲えた。

『君たちにも、あの跫音がきこえるだらう？』

暗と沈默の奥底から、今、獸のそろそろと歩むやうな、柔かなそして忍びやかな音が這ひずつて來るのであつた。

『時々聞えます、ごくかすかに。』

四五人のものゝ入りまじつた、併し低い、脣音のかすれた聲で、かう云ふのであつた。彼らの言葉は、靑年のまだ世馴れぬ調子をもつてゐた。彼らは一所にかたまつてゐるやうであつた。彼らは皆、跣足のやうで時々砂や小石を踏みしだく音がした。

『あの跫音をたよりに、ソッとついてゆくのだ。』

『わかりました。』

冷たい風が、暗い空から、森の上に落ちて、足早に、さわがしく過ぎ去つた。今まで聞えた跫音は、その風にさらはれたやうに聞えなくなつた。

『あ、何かきこえます。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

『ほんとに、――われ〳〵の立つてる大地の下の深い底の方から起つて來るやうにきこえます。』
『何だか破れたヸオロンでも彈いてるやうですネ。』
『私にはすゝり泣きのやうに聞える、何處かそこらに小兒でもゐるんぢやないかしら？』
『貘が今人間の靈の夢をくつてゐるのだ。あれは人間の靈の泣き叫ぶ聲だ。』
『さうでせうか。』
『さうだ。人間は始終夢をみてゐる。その中でも青年は殊にさうだ。常に何か爲やうと思ふ、何か非常な、偉大な事業を爲遂げやうと思ふ。その心が、………』
　案内者は何か考へるものゝやうに、一寸言葉を切つた。
『さうだ！この心、この力がこの世界を動かしてゐるのだ。そして常に新しい世界を創造するのだ。生の幸福の領分を擴張するのだ。』
『すると、貘の食ふのは、男女のみだらな夢や、女の美しい着物の夢や、その外惡夢ばかりぢやないのですか。』
『さうだ。………』
『今云つたやうな、人間の創造の夢も、ほんとに食ふのでせうか。』
『さうだ。若しそれが自分の心にかなはなければ………』
『あ、默つて〳〵！今度は息のつまるやうな、苦しさうな聲がきこえます。』
　青年の一人が手をあげて制するけはひがした。
『人間の靈が、貘の爪牙に傷けられてくるしんでるに相違ない。』
『さうでせうか。』
　前とは別な男の太い聲がした。
『それを疑ふのか。』
『何んだか目に見えませんから。………』
　この時、呻き聲が止んだ。そして前のやうな靜けさの中に前と同じやうな、かすかな併し重さうな跫音が暗の中を進んでゆくのであつた。
　青年らは、一人の人に導かれつゝ、さぐるやうにして小さな音をしたつて行つた。林のやうな、じめ〳〵した道も無い木の間をぬけた。廣い野原の一角と覺しい處を、冷たい草をふんで過ぎた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

最後に墓場のやうな場所を通つた。そして跫音は急に暗に吸ひ込まれた樣に止まつた。彼らも機械的に立止まつた。そして耳をそばだてた。併し何もきこえない。そよとの音もけはひもしない。十分、二十分、三十分、四十分、それ以上も暗い沈默がつゞいた。

『何もきこえませんネ。』

　遂に一人が云ひ出した。

『どうしたのでせう。』

『私達は今何處にゐるんでせう？　此處はどこなんでせう？』

『私は何だか深海の底にゐる樣な氣がします。』

『私は何だか、底の知れない暗い穴へ、自分の身体がだん〴〵落ち込んでゆくやうな、悲しい心細い心持がして來ました。』

『私たちは、かうしてゐて、どうかなるんぢやないだらうか。』

　何と云つても、何故か、案內者は默つてゐる。彼らの心は、不安と恐怖に、かよわい葦の葉のやうにいよ〳〵ふるへるのであつた。

　と、突然、青年の一人が、小い聲で叫んだ。

『おや、女の泣き聲がする。きゝ給へ。』

『…………………まつたくだ。泣いてるらしい。』

『そればかりか、前よりもいやなうめき聲がします。誰か死にかけてか、斬られてかして、苦しんでるんぢやなからうか。恐ろしい、私は恐ろしい。』

『何もおどろく事も無い、恐れる事も無い、あれは靈が血にまみれてのたうち回つてるのだ。おそらく、貘が人間の靈の夢を食ふことを廢めない間、人間の夢は永久に安らかでないだらう、絕えずあのやうに苦しみ叫んで止まないだらう。』

　暫く經つた。苦しいうめき聲も止んで、そして獸の大きい体を起して、歩き出したけはひがハッキリきこえた。彼らは又あるき出した。

二

　それは何の音ともつかなかつた。その音は青年の一團の立つてゐる所からや丶隔つた所から起つて來るのであつた。ある時は荒い鼻息をつく樣なある時は堅い心のあるものを咬み碎くやうな、ま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

たある時は、皮のやうな強靱なものを、非常な力で引き裂くらしく、ある時はポタリ〳〵と液体のしたゝる音がして、すべて夜の物の怪の異様な叫び聲のやうに、暗をつたうて、彼らの耳にひゞいた。

『あれは一体何の音でせう？』

青年らは殆んど同時にそして一樣に案内者に問ふた。案内者は、しかし、ゐるのだかゐないのだか、返事をしなかつた。只、あらゆる響を呑む暗が、ものを云ふが早いか、直ぐその聲をのみ込まうとかまへて、大きな底知れぬ口をひらいてゐるのであつた。その暗い奥から吹いて來る風は、樹木の上を渡ると見えて、繁り葉のそよぎが、彼らの耳に何事かをさゝやく樣に、暗い空から落ちて來るのであつた。

『もう夜明けに間もあるまい、…………　早く夜が明ければいゝ、何だか私は暗い谷底に立つてゐるやうな氣がする。』

一人の青年がかなしさうな聲で云つた。

『私はあんまり暗をみつめてゐたので目が痛み出した。』

『空が晴れるらしい、星が一ッ二ッちらつき出した。』

他の者は、わざと耐へてるやうに、何も口へ出して云はなかつた。彼らの間には、何ものかを待つやうな沈默が行き渡つた。

『あ、見給へ、山の肩の輪廓が、夢のやうにうき出して來た。』

皆その方を見た。

『何んだか永い間日の光をみなかつたものゝ樣に私はあのうすい光が異樣に、そして嬉しくて仕方が無い。あのなだらかな、細い、そして柔い線が私の心と一緒にふるへるやうだ。』

『私も救かつた樣な氣持がする。』

『早くお互の顔をはつきり見たい。』

『さうだ、ほんとに。――』

刻一刻山の形はくッきりと強い線にかはつて行つた。併し山の内面はまだ眠りこけてゐるやうに眞暗であつた。空には水のやうな薄明りがさしてそれが煤のやうな暗を、だん〳〵何處かへ流し去ると、その下の廣い平原は、丘も、流れも、森

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

も、林も、牧場も、人家も、ヴェールをかけた様にうすい光につゝまれた。

『あッ』

一人の青年が突然倒れた。三人の青年は、無言で、元來た道と覺しき方へ何かに追ひ迫られるものゝやうに、夢中に走り去つた。そして只一人の青年のみ、そこに銅像のやうに立つて、眼前の光景を直視した。そこには、十歩ばかり前に、彼らの案内者が、暴風の一撃の下に倒された喬木の類の如く、樹の根に顔を伏せ、髮をみだして、鮮血の中に仆れてゐたのであつた。

『解つた、私には解つた。そうだ、そうに違ひない。併し私はどうしたら可いんだらう？　家へ歸らうか、そして此の事を町の人に告げやうか、それとも…………。私はどうしやう？ 私はどうしたらいゝんだらう？』

彼はだん〴〵明るくなつて行く、曇つた明方の空をみつめてぼんやり立つてゐるのであつた。

にはかに銀のいぶしのやうな濃霧が、平原の上にふり出した。そして丘や、流れや、森や、牧場と共に、立てる青年の姿も、案内者と氣絶した青年の二ッの屍骸も、守るやうに柔かく、その中につゝんで了つた。

それから暫く經つた。霧の中に、あたりに土を掘るけはひして、幾度かきつく石なぞに當る鍬の音が、濕つた空氣にひゞいた。やがて霧も霽れると、そのあとに、そこの樹の根方に深い穴が掘られて、暗い大きな口をあいてゐた。

そして先きの青年の、向ふの暗い森の中へ入つてゆくのが見えた。（をはり）

■近代思想第一卷合本■

■一部金壹圓でお譲り致します。
■尤もごく僅かの部數しかないのですから、お望みの方は、なるべく早く、お申込を願ひます。
■本月十日頃に製本が出來る筈でございます。

近代思想社
振替東京 一七一六三

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

小川巡査

△　〇　生

小川巡査は今朝、出勤するとすぐ、發賣禁止になつた書籍や雜誌の押收を命ぜられた。

主任部長の差出す警視廳から廻送された書類から、發賣禁止の書名、發行所を、手早く手帳に寫しとると、早速出掛けて行つた。

『どうも君が行くと、押收して來るのはたまさかで、押收して來ない方が多いが、眞實に賣り切れてるのかね。』

この間、署長に疑ひ深い問ひを發せられたことを途々想ひ出して『今日こそはどつさり押收してやらう』斯う心に呟きつゝ、小川巡査はとぼ〳〵歩いて行つた。初秋のうすら寒い風が街を吹いて空は曇つてゐた。

警察から一番近い書店までは僅か二三丁しかないが、其の間にも小川巡査は二度も人に道を尋ねられ、乞食を一人追拂はなければならなかつた。東京へ出て來てやつと一年、巡査を拜命して二ケ月にしかならないので、彼は乞食を叱るにも國訛りに氣が引けた。

『だが、今日こそ巡査としての品格を保ち威嚴を備へて應對しやう、署長からの疑を解くために、是非誤魔化されずに押收しやう』と、小川巡査は確と心を引緊めて本屋の店へ這入つて行つた。

と、帳場にゐた主人は彼の姿を認めて、愛想の好い顏をして出て來てお辭儀をした。

近頃發賣禁止が日に幾度となくあつて、その度每に顏を合してゐるので、いゝ位顏馴染でもあり殊に小賣商店にありがちの如才のない主人の顏を見、打解けた挨拶をせられると、氣のいゝ彼はゐられなかつた。彼の氣六ケ敷さうな顏はいつの間にか解れて、綻び初めてゐた。

『×××がありますか。』

『また來ましたよ。』と言ふやうな表情をせずには

それでも可成り氣張つてかう言つたが、

『もう悉皆賣り切れて了ひましたが……』と、ニコポン顏で頭を二つ三つ下げられると、それが確にうその皮だと思ひながらも、『もう一冊もありませんか？それぢや、何冊來て何日に幾冊賣れ、何

日に幾冊賣れたか帳面を見せて下さい。』と言ふことが言へなかつた。

『左樣でせうねえ。もう出てから四五日にもなりませうから……。』と、つひ例の調子が出てしまつた。

小川巡査は店頭を出ると、ホッと吐息をついた。自分の臆病な態度に愛想をつかしたが、また署長の皮肉な顏が目の前に見えて、明日にも諭旨免官をさせられるやうな不安と恐怖に襲はれた。

『君はどうも人が良すぎて不可い。』と、古參の同僚や部長の憐れむやうな顏も目に浮んだ。

なぜ自分は斯うも意氣地がないだらう……なぜあの時念を押さなかつたらう』と、小川巡査は吾れながら意氣地のなさ加減に腹が立つた。『他の同僚達のやうに「おい、こら！」もどうもうまく口へ出て來ない。女房や子供を叱る時のやうに、痛快に口をついて迸り出ない。この間公園で密會の若い男女を捕へた時にも、「貴方がたは今なにをしてゐましたか？」と自分は言つた。あの時だつて、まづ最初認めたとき、「おいこら！」と言つて、奴等の度膽を拔いて置いて、それから尋問にかゝらなければうそだつた。それを自分はあんなへまをして泣き附かれて、折角の獲物を遁した。そして自分の職責を完うし得なかつた。然し……然し、考へてみればあの若い男も可哀想は可哀想だ。若し自分が飽迄職務を執行しやうとすれば、彼等二人は勢ひ、犧牲にならなけアならず、新聞に掲載されて、聞くも忌しい醜名を天下に晒し、未來ある前途を葬らねばならぬ。若い時代にはよくあることだ。自分さへ知らぬふりしてゐれば好い。あながち罪するのみが巡査の職務ぢやない。あの時もさう思つて許してやつたが、考へると、自分はどうも人情に絡まれて不可い。

小川巡査はこんな事を思つてる中に、ふと今の本屋でたづね殘した事を憶ひ出した。×××の外に、まだ五六點の發賣禁止ものがあつたと氣附くと彼は急に動悸がして、異常な不安に囚はれた。若しあの禁止の中の一點でもあつたらどうしやう萬一それが署長の耳へでも入つたら…小川巡査は後戻りして確めておかうとも考へたが、いざ後戻りするとなると、なんだか自分の威嚴を傷けられるやうで……『いや、今まであの店に大阪發行の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ものがあつたためしがない、ないに極つてる」さう逃げ道を拵らへて到頭彼は後戻りを止した。

『主人か支配人か……。』

小川巡査は次の本屋へ入ると嚴めしく言つた。そして自分ながら、近頃にない大出來だつたと感心した。

『×××がありますか？』

朝鮮髯を生やした不景氣な顔の四十近い男を、眼下に見降すやうにして言つた。

『來ました日にすつかり出して了つて、一部も御座いませんが……。』

どこまで頭が低いか底の知れぬほど、ペコ〱して番頭は答へた。

『一体幾冊來ましたか』疊みかけて、『もう一部もないのかね。』

『へえ、もう一冊も御座いません。千部來るには來ましたが、來ると直ぐ地方へ出して終つたものですから……。』

小川巡査は落膽した。こゝは卸賣ではあり、一冊や二冊は出してくれるだらうと期待して來たのに一冊もない。

『今日も一冊も押收せずに歸らねばならんのか』と情けなく思つたが、この時ふとあまりに自分が高壓的に出たので、番頭の氣を惡るくしてそれで出してくれないのかとも思つた。

『それぢや、これはあるかね。大阪の發行で、夜の快樂、男女交合の祕訣、夜の幕のさゝやき、色情と衛生……。』

小川巡査が少し穩やかな言葉で讀み出すと、最初は一々ございません〱と答へてゐた番頭も、終ひには『大阪ものは一つも取次いでをりませんから』と、うるさゝうに言つた。然しそこには、一點の疑ひを挾む餘地もなかつた。小川巡査は鬱ぎ込んで其處を出た。

到頭その日、小川巡査は一番終ひの小賣店で、漸と一冊押へることが出來た。

『×××はこれ一冊かね。』

店の陳列臺に出してあるのを押へて、小川巡査はきいた。

『えゝ、それ一冊でございますが、發賣禁止にでもなりましたか。』

主人はあはてふためきながら言つた。主人の顔

には『しまつた！』と言ふ表情がありありと上つてゐるのをみて、小川巡査は痛快に思つた。
名刺に『×××一冊差押ふ』と書いて渡すと、小川巡査はさつさと外へ飛び出した。
『俺だつて巡査位は務まるぞ』
堪らない嬉しさに胸は波だつてゐた。破れ靴をコツコツ踏み鳴らした。
暫く歩いてから、小川巡査はふと手に持つてる『×××』が何んで發賣禁止になつたか、どんなことが書いてあるかみたくなつた。人通りの尠い街筋に這入ると歩きながら一枚一枚めぐり始めた。○○○や、……のあるところを一々と眼を皿にして頁を繰つた。丁度『○○』と言ふ小説に澤山の伏字や點線を見附け出した。
小川巡査は空腹に食を求めた時のやうに、その前後を貪り讀んだ。そして吾にもあらず身心の緊張を覺え、昂奮を感じた。淫らな光景が眼の前に現はれる、彼は甘い愉悦に浸つて、人眼を氣遣ひながら初めから讀み出した。
小川巡査は勢ひよく、署のドアーを開けた。
『もう出てから四五日にもなりますさうで賣れて了つて、漸く一冊差押へて來ました。』
署長の前で小川巡査は欣然として復命した。
『あゝさうでしたか、今日は君が大殊勳でした。』
署長はいつもに似ず微笑して、『發賣禁止はどこが惡るいのかねえ。』
『さあ、どこでございますか。』
小川巡査は白ばくれて云つた。
署長が雜誌をバラバラ繰つてる中にも、小川巡査は讀み殘しがあるのを殘念に思つた。
暫くすると、小川巡査は受持交番の交代時間なので出かけて行つた。
その日中、交番の前へ立つてゐながらも、讀み殘したあとの面白味が、それからそれへと小川巡査の頭の中に渦を卷いてゐた。
その夜小川巡査が勤務を終つて、歸り際にまたその雜誌を讀まうと思つて、彼方此方探したけれど到頭みえなかつた。
『小川君、なにを探してるんだね。』
同僚の一人が訊いた。
『うゝなに……なんでもない。』と小川巡査は言葉

を濁した。

『君、今日「×××」を差押へて來たさうだが、一寸みせないかね。』

『そりや僕は署長に差出したから知らんよ。』

二人の話を聞きつけた一人の同僚が『署長が雜誌を一冊持つて歸つたが、それぢやないかね。』

小川巡査と同僚は眞面目な顔を見合した。

大久保より

桑

■丁度桂の死んだ十一日の夜、京橋元數寄屋町の富嘉川で、久しぶりで社同人の小集を催した。富嘉川はツイ二三ヶ月前に、其の開業披露文を賣文社に依賴した緣のある家だ。集まるもの佐藤、安成兄弟、和氣、堺、片山、久津見、小原、德永、荒畑、大杉、及び原田讓二、柴田柴庵、赤堀建吉、鈴木長次郎の十五名。

■僕は月初から氣管支を病んで寢てゐたのが、小集で夜をふかしてウンと惡るくし、漸く少しく治りかけたのを又十六日の新劇社の總見であと戻りさせ、遂に今猶床に就いてゐる。しかし其後は神妙にしてゐるから、もう二三日で治る事と思ふ。そんな事で原稿は一つも出來ず、編輯の雜務も二郎に任して了つた。

■佐藤緑葉はカーリン・ミヒヤエリス女史の『エルジエ・リントホルド』を譯了し、十一月中旬以文館より出版の筈。

—十月廿二日—

■死の歌（鈴木悦譯）

ズウデルマンの『死の歌』、及び『テア』の二篇の飜譯で、共にその人生觀を窺ふに足る作である。『死の歌』のマリイは形式的な、宗教的な結婚をした夫の病を看護しながら、同宿の男女の密會を垣間見て、初めて純眞の戀を知つたが、既にその時は病夫は息を引取つて居た。隣室の男女の熱い烈しい戀物語は、夫にも妻にも死の歌であつたといふ處に、著者の戀愛觀が見られるのである。作者の名は『故鄕』のマグダによつて有名であるが、然し此の作の如き、その心理描寫の精細巧緻に於て、劇とは獨立な名聲を博するに充分である。譯者の筆はやゝ流麗を缺くを憾みとするが、原作の匂ひと氣分とを現はさうとした努力は多とする。（寒）

（金四十五錢神田南神保町海外文藝社）

■噴火口（高島米峯著）

灰篇砂篇礫篇の三篇に分ち、『家庭に於ける屁の力』を卷頭として、或は婦人問題に、或は宗教問題に、或は政治問題に、逵筆に任して其の御得意の常識論を噴き散らしたもの。讀んで面白く且つ害にならず。（金八十錢小石川原町丙午出版社）

■ひとみの旅（杉村楚人冠著）

嘗つて東京朝日新聞に連載した其の旅行記を集めたもの。『後の越後』中の『人々自治の念が發達するに連れて、警察取締が警官の手より私人に移らんこと、自らなる道理なり』は善いが、此の『私人』を大地主に適用した所などは、流石に昔し社會主義者と自稱した著者の達識である。（金六十錢小石川原町丙午出版社）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

虐殺の翌朝

Pataud et Pouget

荒畑寒村

二

月曜日の朝になると、巴里は一大事の差し迫つた日の、顫へるやうな光景を呈した。血のやうな太陽の光は、低く垂れた灰色の雲から迸れ出で、東から吹いて來る疾風は、ゾクゾクするやうな寒さを伴つた。それはまるで、民衆の心の狀態を映したやうな天あひであつた。その人々の心の内には、てふど烈しくなり出した憤怒の風が、反抗の爲に大きいといふことを人に想はせたやうに、暗い、そして荒れ狂へる考へが渦まいた。

夜があけると、郊外から流れ込んで來る群衆は、ふだんに比べて幾らか疎らだつた。地下鐵道でも、乘合自動車でも、電車でも、皆ないつも程はこんで居なかつた。

平生の習慣の力で、仕事に往くつもりで家を出た勞働者は、途中で輪轉機から刷れたての、まだ濕つた、インキの重い香のする新聞紙を買つて、熱心に讀み耽つた。惱ましい豫覽、ボンヤリした不安が、空に漲ぎつて居て、心を重苦しくさせ、また眉を蹙めさせた。そうして人々は、政府の入費に關して、ザツとした批評を加へたり、短かい會話を交したりする許りだつた。

一体の調子が悲觀的で、用心深い者は『どうも物事がだん〴〵惡い方へ向いて往く。』と云つた。此處彼處で、急激猛烈な運動や、焰ほの瀑布のやうな言葉が、怯懦卑屈な無感覺を震駭させた。

で、仕事に往つたのは、何れも皆な從順な、意氣地の無い、馴らされた勞働者だけだつた。然し今日は、憤怒の烈風が猛激な叫喚と溶け合へ、こういふ者達さへもヒツ湊つて往つて了つた。

工場や製作所などでは亦た、職員が不足であつた。それに、仕事に來た勞働者は、いつものやうに熱心に働らかず、その動作は、彼等を壓し付けて居る不安と、危惧とを表はして居た。

前の晩、悲憤激昂せる辯士等は、種々な集會で

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

旋風のやうな感情と、怒濤のやうな雄辯をもつて晝間の出來事を論說した。

同盟罷工委員等は、こういふ集會を一つ一つ訪ふた。そうして、その演說を力强く、華々しく、生氣漲り、活氣溢れしめんが爲めに、彼等は犧牲となれる同志の最後を畫き、その家族の悲嘆を述べ、その寡婦孤兒の恐怖と絕望を語り、殆んど彼等を窒息せしめんとする如き痛憤激怒を表はしつつ、最後の結論として、勞働者は須らく總同盟罷工によつて、平民階級の一致協同を示すべきことを鼓舞激勵した。げにそれは、勞働組合團体が合圖を與ふるのを俟つ事なく、直ちに實行しなければならぬ！。

此の命令は、自然に澎湃たる波濤のやうに擴がり、また暗默の同意によつて延びた。さればこそ月曜日の朝、勞働者全体の意嚮は旣に同盟罷工に傾き、そうして、繼續して居る職業とては、甚だ部分的に過ぎないのであつた。

間もなく市街は、ニユウスを求むる興奮激昂した群衆に滿たされた。或る者は勞働總同盟の事務所の在る街の方へと赴き、また或る者は、勞働取引所の方へ出かけて往つた。然し最も多く群衆を惹きつけた中心は、前日の虐殺の舞臺、即ち犧牲の斃れた大並樹路の隅であつた。

民衆は終日、此の地點に巡禮した。人間の流れが、高處から此處へ降つて來た。群衆は深く感動したが、然も最近の版を賣る新聞賣子の呼聲の外何の叫びも泄れなかつた。渦が群れとなつた時、團体が一緒に集まつた時、彼等は直ちに巡査の『さア往け、往け！』といふ定文句で散らされた。が、そう命令するにしても、巡査は非常に悔んで居る風だつた。群集は苦々し氣に、グズグズし乍ら從つた。まるで永い間の痲痺から醒めたばかりで、巡査を恐怖憎惡はするものゝ、まだ之に反抗するだけの力をもたないと云つたやうに……。

夜に入つてから、血の流された地點には、多くの花束が三角塔のやうに積み上げられた。只だ政府は、人民の激昂を增すことを恐れて、別に干涉がましい手出しはしなかつたが、その代り巡査の警戒を一層嚴重にし、そして、工場や十字街等に於ける軍隊の守備を益々堅固にするのであつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

盟の委員等は、熱心な會議を開いて、熟慮討議の末、遂に『一致協同の同盟罷工』を斷行することに決した。で、有ゆる職業の勞働者をしてその仕事を罷めさせ、そうして、政府が勞働者をして殺害した下手人を處刑し、その當面の責任者――必ずしも直接手を下した者のみで無く、之を命じた者を出すまで、同盟罷工を繼續させるといふことに一致した。

やがて同盟罷工の宣言が知れ渡ると、それはまだ只だ決議だけに過ぎないのに、既に午前中に開始せられ、午後に至つては非常に擴まつたほど、急速に四方に伸び擴まつた。示威運動者は行列を作つて、製作所や工場に赴むき、同盟罷工の決議を告げ知らせ、仕事を抛下して罷工に加はるのを躊躇逡巡する者を羞ぢしめたり、罵しつたりしたが、大低の場合、永く非難するを要さなかつた。大した騷ぎも無く、罷工者の數が增えて往つたので……。

こうして、民衆の心が醱酵して往く間に、彼等を動かした出來事は、國會の方へ向きを換へた。社會黨議員が提出した質問書は、勞働組合に對して障碍を作つてゐる政府黨や、保守黨によつて冷やかに迎へられた。大臣は說明を拒絕し、秩序恢復後に於て、質問批評に答ふべきを以て、政府の行動は一切討論無しに賛成して貰ひたいと述べた。革命の起り際の政府といふものが、いつでもそうであるやうに、彼等は今も樂天的で盲目であるばかりで無く、此の事件はそう嚴肅に考へる必要が無い、秩序の恢復せらるゝは將に數日を出でずと告げた。そして議員の大多數は、政府の此の態度を賞讃した。

議會から何一つ善良な事を豫期しない民衆は、正當に議會を目して敵とした。彼等はその無頓着に、侮蔑と皮肉な罵詈とを酬ひた。彼等はその態度を憤慨もしなかつた。彼等はブルボン王宮（國會）に對つて進む熱心の欠乏によつて、最早や其處から何物をも望んで居ない事を知らしめた。

十九世紀の末葉、人心恟々物情騷然として、國民等しく國會の議決に關して不安危惧を感じた當時、人間の波濤が奔流洶湧したコンコルド廣場は、

今は別れて家に歸る、中心點に過ぎなくなつた。同情から、或は單に好奇心から、虐殺の場處を見やうとして、並樹路に横溢した群衆は、マデレエヌとコンコルド廣場の方へ追つ拂はれた。

それは實に、引き寄せられたので無くて、追ひやられて其處に至つたのだ。

群衆は方尖塔と、それを取り巻いて居る噴水の周りに集まつたが、しばらく、四邊の光景に見恍れてしまつた。見よ！、いま凱旋門の背後に沈み往く太陽は、並樹街を輝やかして、樹々の靜かな黑い枝葉を、まるで火のやうに染めなして居る。群衆はしばしの間、此の眺めに心を奪はれて、また王宮の建物(國會)に、眼を惹かれなかつた。その薄暗い蔭影に沒した巨大な形は、まるで偉大な墓標のやうだつた。それは夜の世界へ入つたやうに、死んだ物のやうに、もう既に過去に屬するやうに見へた。

此の日は、別に非常な事件も起らないで終つた。期待の一日だつた。その間、敵手と敵手とは、互に睨み合つては居たが、衝突する迄には至らなかつた。が、或る處では小戰鬪が起つた。原因は巡査の遣り損ひで、彼等は官憲に對する民衆の尊敬や服從が、どの位ゐまで減つて居るかも知らずいつもの通り意の儘に從ふものと思つて、幾人かを逮捕しやうと試みたのであつた。然し、民衆は忽ち憤慨して干渉して、遂に四人の釋放を强制した。此の官憲に對する尊敬の缺乏、まだやゝ穩やかではあつたが、こういふ急劇な服從の拒絶、皆な政府にとつては惡い前兆であつた。

夜になつて、騷ぎは別種のものとなつたが、然し決して減りはしなかつた。前夜のやうに、それは多くの集會、種々な公會、傳道者團体の會合、勞働組合の寄り合などに集注した。會堂は熱を病んだやうに興奮して居る群衆が溢れ、新來者は空席が見付からぬ爲め、戸口に群れ集つて居た。演說は嚴肅だつた。是れは長々しいお喋べりの時では無い、然し如何いふ手段を執ればいゝか、そうして、同盟罷工が一般に亘るまで、その運動を强め、速め、且つ擴める爲めに、決意と力とをもつて行動する相談の時なのだ。

有ゆる勞働組合團体の委員會は、しよつ中開會して居た。聯合委員會は、その初めの宣言書に於

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

て、同盟罷工を行ふ理由を説明し、曩に勞働者の虐殺下手人の處刑、勞働階級に對する不正の陳謝を要求して置いた政府に向つては、更に最後の通牒を述べた。此の革命の閾際で、發意者が之を政府に對する最後の通牒に狹めて了つたのは、必ずしも怪しむを須ひない事である。社會革命は猶ほ有機体の如きものであつて、有機体の生るゝ、細胞若くは芽よりし、かくて徐々に發達するのである。その始めに在ては、新しい生物は極めて弱く革命は未だ形を定めない。實に革命は、その最も熱烈なる維持者、衷心よりその到來を希ひ、その時期を通じてその最後の發達に盡力する人々さへも、その到來を豫感するよりは、寧ろそれを願ふに過ぎないほど、形が判然して居ないのである。

先の革命は皆なそうであつた。それはその反對者ばかりで無く、時にはその最も忠實な維持者さへも驚かした。只だ革命に際して、心の底から革命的である人々の特質は、彼等が如何に機會を利用すべきかを知り、常に運動の陣頭に立ち、決して革命の爲に追ひ超されなかつた事であつた。

今度とても、やはりそうである。

聯合委員會を激勵し、共通の渴望を結び合せた思想は、政府を振盪恐駭させる爲めに、同盟罷工を惹起するに在つた。

故に委員會は、その宣言書を發したのであるが、その後、地方へ代表者を送る事に就て、勞働組合の聯合會議所と一致した。此の代表者は産業及び商業的見地から、最初に戰略上の地點、交通の大動脈、その産物が社會の運用に最も必要な中心を訪ふべき命を受けた。彼等は其處で同盟罷工に對する説明を試み、熱情を煽揚し、虚僞の報導に弱められて、敢爲決行を躊躇する者の勇氣を燃やさうとするのだつた。是れは中心から中心へ住く時の、彼等の事業であつた。

此の運動に加はつたのは、啻に勞働組合團体のみでは無い。有ゆる革命的團体、非軍備主義團体及び秘密結社等は會合を開いて、如何して運動を援け、如何いふ手段を執る事を忠告しやうか、といふやうな問題を論じ合つた。

非軍備主義者の團体は、中にも此の事業に熱中し、建築業に於ける同盟罷工と共にその活動は十倍した。巴里中がまるで、塹壕を掘つて野營され

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

て居るやうになつた事を、各處に散在する兵士に見せ付け、兵隊になる前には、彼等も亦た勞働者であつた事を思ひ出させ、そうして、兄弟なる勞働者の血で自分達の手を汚すなといふことを教ゆる、非軍備主義の傳道に對する實り多き野が、自ら前に現はれたのだ。

此の事業に、こういふ團体は撓まざる精力と、火のやうな熱心とをもつて從つた。

民衆の側に、同盟罷工が一層組織さるゝと同時に、政府も亦、無頓着に止まつては居なかつた。彼等は既に充分だと思はるゝ防禦手段を増すの愚を想ひ、專ら力を罷業の防護に注いだ。それに一つは、政府はタカをくゝつて居たのだ。今まで總同盟罷工を企てた事はあつても、皆な何れも部分的なものゝみだつたので、今度もまた同じ事だらうと安心して居た。

それでも、彼等は不注意と思はれまいとし、また紳士閥を惱ましい感情から救ふと同時に、政府の名聲をも墜さない爲めに、此の社會的危難を制止すべき能力を示さうとした。それには軍隊の手工勞働によつて、同盟罷工の不便を除く外は無いので、此の意味の命令を發した。で、早速雇主組合や大商會で調査して、同盟罷工の不便を癒して、更に勞働の繼續を確かしむるに足る兵士の數も略ぼ知る事が出來た。そこで、種々な産業に於ける軍隊使用に對して、動員令は直ちに用意された。

或る者は、猶豫せずと、勞働者の傍に兵士を置くがいゝと云ひ出した。いつでも代つて仕事をする者があると知つたら、勞働者も同盟罷工の無益なのを悟るだらうと、彼等は考へたのであつた。が、一層心理に通じて居る資本家は、そんな事は非常に恐ろしい結果になつて、最も臆病な者をも反抗させるに違ひないと反對した。そうして、必要の際に兵士を雇ふべき職業の表と、産業の分類とを作るに專心した。

かうして兩方の軍營に、最後の戰鬪準備が整つた時、夜は漸やくに進んで往つた。

大きな都會は、不安な無感覺の中に痲痺して了つた。そして、晝中の響きに代へて、陰欝な沈默がその上に擴がつた。それは只だ、街から街へ巡廻する衞兵の、鏗爾たる佩劍の音によつて亂されるのみである。(未完)

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

■寄贈雜誌■

創造　馬上大學　第三帝國　生活と藝術
青鞜　帝國文學　新公論　實業之世界
新潮　新佛教　新文林　人生と表現
白樺　モザイク　東洋哲學　ダイヤモンド
假面　新世紀　新眞婦人　ナショナル
創作　現代詩文　圖書評論　ウォールド
相對　婦人評論　英語青年　支那と日本
護教　文章世界　眞人道　家庭と教育
銀磬　とりで　村落通信　東京魁新聞
凍野　獨立評論　新東京　鑛業及鑛夫
河鹿　世界雜誌　公友新報　ダンバコ
內外教育評論　名古屋經濟雜誌　日本婦女新聞

■九月號目次■

自由(詩)…………寒村
生の道德(評論)…………大杉榮
『出發前半時間の人生觀』(評論)伊庭孝
判(詩)…………寒村
都會小詩(詩)…………土岐哀果
胡麻鹽頭(雜錄)…………堺利彥
郊外生活(短歌)…………安成二郎
いやな顏(詩)…………德永保之助
ある日(小說)…………筒井吉久
『內部』と『モンナヴンナ』(批評)佐藤緑葉
暴風雨(小說)…………荒畑寒村

■本社取次書籍■

本社に於て次の新著を推奨し、取次販賣をする。御注文は成るべく振替貯金によられたい。價は定價通り、郵稅は當方もち。

▲創造的進化　(ベルグソン著　金子馬治・桂井當之助譯　金一圓八十錢)
▲密蜂の生活　(メエテルリンク著　岡本清逸譯　金一圓廿錢)
▲エミール　(ルソウ著　三浦關造譯　金一圓六十錢)
▲生命論　(永井潜著　金二圓五十錢)
▲遺傳の研究　(渡邊喜三著　金一圓五十錢)
▲ニイチエ研究　(和辻哲郎著　金二圓五十錢)
▲マダム・ボヴリ　(フロオベル著　水上齊譯　金一圓廿錢)
▲寸鐵　(ラロシフコー著　高橋五郎譯　金八十五錢)
▲予の世界　(安倍能成著　金一圓廿錢)
▲チョコレェト兵隊　(ショウ著　伊庭孝譯　金四十錢)

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵稅を要す。
■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。
■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。
■本社振替貯金番號東京一七一六三。

大正二年十月三十日印刷納本
大正二年十一月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社內
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　敎文館印刷所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆館

地六社復刻版

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

◀斯の生活●斯の藝術▶

■第三號發行■

青年の間に同志を求む■

生活と藝術

菊判七十二頁
定價一冊十八錢
送費一錢
六ケ月分一圓〇八錢

■生活の革命（評論）……仲田勝之助
□みな一しよに（詩）……哀果　□プランタンの夜……原田讓二
■端的な要求（評論）……相馬御風
□伊庭孝一座……楠山正雄　□教室より……矢口達
■發途（歌）……土岐哀果　■新しい男……堺利彦
□記憶のために……TA　□文展概評……黒田鵬心
■ルバシカの着ごこち（感想）……杉村楚人冠
□藝者と芝居（詩）……西村陽吉　□MEMO……哀果生
■その朝（戯曲「新好色一代男」の一）……仲木貞一

發行所　東京市日本橋區檜物町九番地　東雲堂　振替東京五六一四　電話本局一八七一

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

青鞜

十一月號

十一月號内容

なげき（短歌）　岡本かの子
三つの夢（飜譯）　オリヴシュライネル　山田わか譯
動搖に現はれたる野枝さん　らいてう
うすさむ（戯曲）　小林哥津
九月の作より（短歌）　柴田かよ
ソオニア・コワレフスキー自傳　野上彌生譯
染井より（感想）　伊藤野枝
自己のある心に與ふ（感想）　西崎花世
少數對多數　エンマ・ゴルドマン　山田須美
青鞜社詠草　伊藤智惠　片野珠（其他）
北の郊外より（感想）　岩野清
編輯室より　同人

■定價一冊金廿九錢・送料一錢五厘■

青鞜社補助團　會員募集　自九月一日 十月三十日限

□青鞜社補助團は青鞜社の事業を完成せしめんが爲め經濟上の補助をなすを以て目的とす

□甲種會員　一ヶ月會費　壹圓

□乙種會員　一ヶ月會費　五拾錢

□本團は會員に對し青鞜社發行の機關雜誌「青鞜」を每號贈呈す。

□甲種會員には會費全納後なほ滿二ヶ年間雜誌「青鞜」と青鞜社出版の圖書とを其都度に贈呈す。

□乙種會員には滿二年間雜誌「青鞜」のみを贈呈す

□本團員は甲乙に拘はらず女子に限りて「青鞜」に寄稿し得るの特權を有す。
但し寄稿が二回以上「青鞜」誌上に掲載されたる場合は本人の希望により相當の手續きを經て青鞜社の社員たることを得。

□入會申込希望者は二錢切手封入、府下巣鴨一一六三青鞜社内補助團宛申込まるれば明細なる規則書進呈す。

發行所　府下巣鴨町一一六三　青鞜社

『東京朝日』記者 杉村楚人冠先生新著

ひとみの旅

三六判美本
定價六十錢
郵稅八錢

長い足、鋭い眼、明な頭、太いペン、而して此書成る。しかも山水の景を描かず、風月の樂を語らず、專ら現代を寫し、人間を論ず。曾て洛陽の紙價を貴からしめたる『大英遊記』以來の名文にして、又曾て、發賣禁止の嚴命を蒙りたる『七花八裂』以來の奇著なり。

ベークマン原著
杉村縱橫先生譯補

改訂増補 強肺術

好評二十版
定價四十錢
郵稅六錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を讀め
此書に六の特色あり。
第一、時間を要せざること。第二、費用を要せざること。第三、場所を要せざること。
第四、勞力を要せざること。第五、言文一致なること。第六、總ふり假名付なること。
故に男子は勿論、婦女小兒と雖も、容易に理解し容易に實行し、而して確實に其功を收め得べし。

東京小石川原町 貯東京一五六八六 **丙午出版社**
東京小石川原町 貯東京一三五三 **鷄聲堂**

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

近代思想

第二卷第二〻

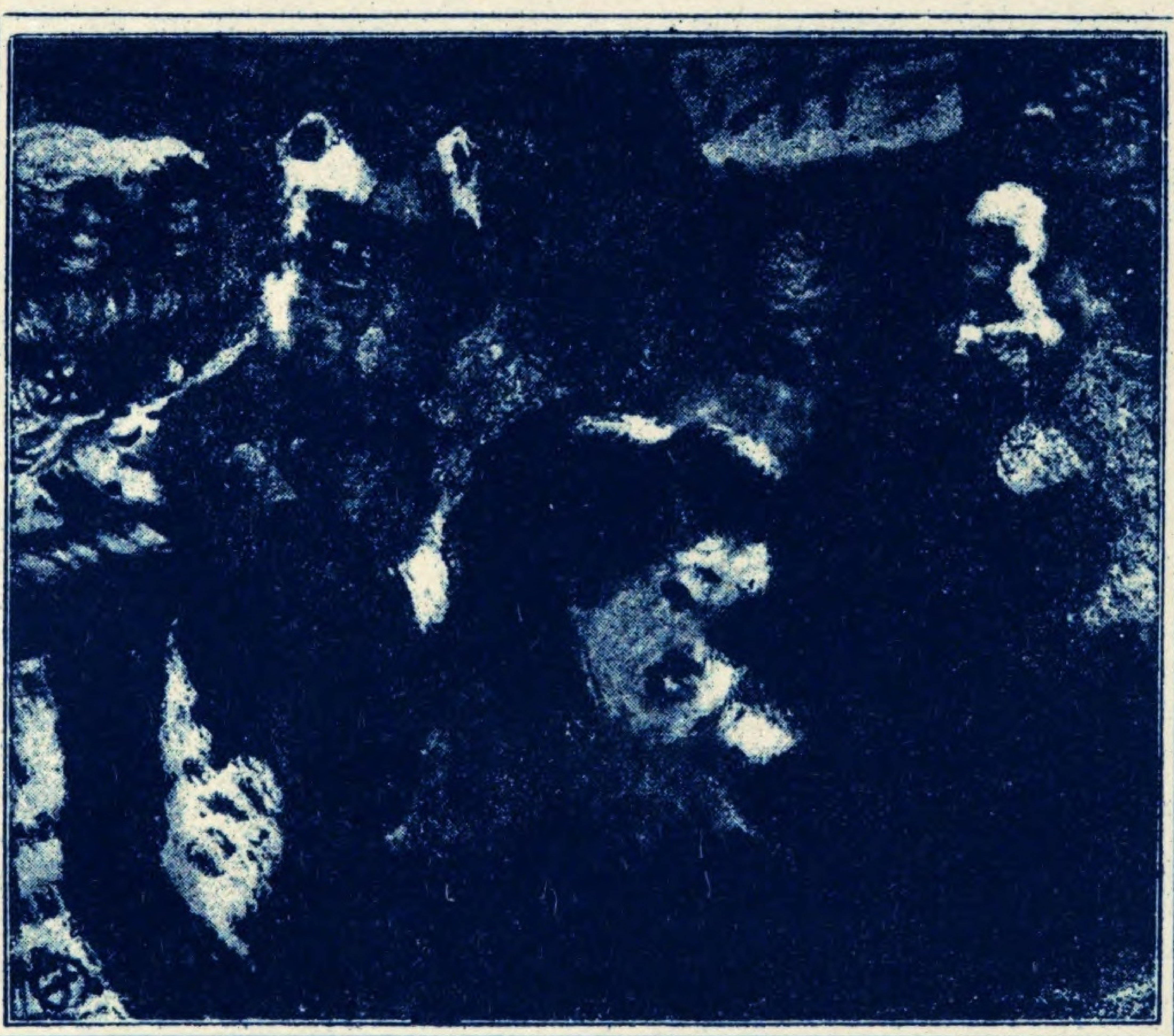
大正元年十月一日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
大正二年十月三十日印刷納本(大正二年十一月一日發行)

十一月號

金十錢

活動の朝のライオン齒磨

旅行にはライオン煉齒磨を！



家庭ではライオン粉齒磨を！

休息の夕のライオン齒磨